

患者に情報と選択肢を

「患者よ、がんと闘つな」などの著書で知られる慶応大病院の近藤誠医師が刊行した「医者に殺されない47の心得」(アスコム刊)が、100万部を突破するベストセラーになった。他にも手術や投薬による「標準治療」や過剰な延命治療の在り方を批判する医療書籍の売れ行きが好調。患者側の意識にどんな変化が起きているのか、近藤医師に聞いた。

「医者に殺されない47の心得」著者 慶応大病院 近藤 誠医師に聞く

「医者に殺されない」は過激なタイトル同様、内容もインパクトが強い。見出しには「医者に殺されない47の心得」とある。著者によれば、早死にするほど死者を増やす。1テーマ3ページ程度の構成で、手術や抗がん剤などを使って多くの病院で実施されている標準治療の問題点を指摘。医療をめぐる常識を覆していく。

「自分の身は自分で守ることが重要だ」とも述べている。今後が広がっている」と分析。今後患者が自ら考え、判断できるように、情報と選択肢を提示していくという。

「医者に殺されない47の心得」は過激なタイトル同様、内容もインパクトが強い。見出しには「医者に殺されない47の心得」とある。著者によれば、早死にするほど死者を増やす。1テーマ3ページ程度の構成で、手術や抗がん剤などを使って多くの病院で実施されている標準治療の問題点を指摘。医療をめぐる常識を覆していく。

「自分の身は自分で守ることが重要だ」とも述べている。今後が広がっている」と分析。今後患者が自ら考え、判断できるように、情報と選択肢を提示していくという。

不必要な治療受けぬよう

「医療に百パーセントはない。一冊の本だけを信じているのではなく、参考書として読むのが望ましい」と西多医師。医療書籍では異例のミリオンセラーを、まずは医療の実態を知り、治療の選択肢を広げよう、と訴えている。

「医療に百パーセントはない。一冊の本だけを信じているのではなく、参考書として読むのが望ましい」と西多医師。医療書籍では異例のミリオンセラーを、まずは医療の実態を知り、治療の選択肢を広げよう、と訴えている。



「手術の合併症や、抗がん剤の毒性が原因で亡くなっている患者は多い」と話す近藤誠医師



「医者に殺されない47の心得」など評判の医療書籍

「予防医療」が特徴 医療書籍刊行相次ぐ

刊行が相次ぐ一般向け医療書籍の多くは現役医師が執筆している。過剰な薬物投与や延命治療を行ってきた医療の問題を指摘し、食習慣の改善や禁煙を勧める「予防医療」の観点が入り込んでいるのが特徴だ。

財政破綻した北海道夕張市の医療再生に取り組んだ村上智彦医師は著書「医療にたかるな」(新潮新書)で「過剰医療」を医者と患者の双方がつかって来た構図を批判する。この他にも「薬をやめれば病気は治る」(岡本裕著、幻冬舎新書)、「穏やかな死に医療はいらない」(萬田緑平著、朝日新書)など近藤誠医師の主張に通じる本も多い。

一方、がん治療をめぐる、近藤医師の主張は極論として異を唱える医師もいる。兵庫県尼崎市で在宅医療に力を注ぐ長尾和宏医師は「抗がん剤10のやめどき」(ブツクマン社刊)で、抗がん剤の副作用とがん延命治療の実態を解説。抗がん剤をいつやめるかを見極めながら、QOL(生活の質)を維持する治療法を紹介している。

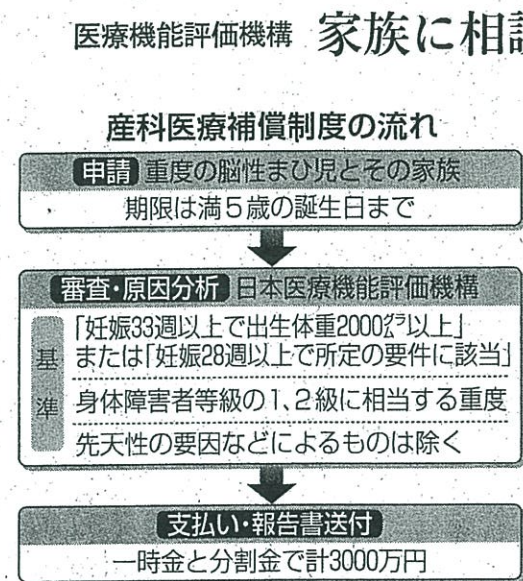
健康・福祉

脳性まひ補償 申請漏れ注意

家族に相談呼び掛け

出産に関連して重度の脳性まひになった子どもとその家族に補償金30万円を支給する「産科医療補償制度」で、運営を担う日本医療機能評価機構が「申請数が推計より大幅に少なく、申請漏れがあるはず」として保護者に積極的に相談するよう呼び掛けている。

制度の発足は2009年1月。申請期限は満5歳の誕生日までで、09年生まれの子どもは、来年の誕生日が期限。支給の条件を満たしていても期限までに申請しなければ補償金10万円(妊婦33週以上かつ出生体重2千ギ以上)



上の身体障害1,2級相当の脳性まひ③先天性の要因などによるものは除く。1など一定の条件を満たす場合、医療機関の過失の有無にかかわらず支給される。600万円の審査請求は245件で補償対象となったのは211件(8月末現在)にとどまっている。

申請が少ない理由としては、対象の条件が十分理解されておらず、医師が家族に対象外と説明したり、家族が申請を諦めたりしている可能性があるという。

機構の後継理事は「脳性まひは分娩に問題なく退院した後でも、成長に伴い判明するケースもある。先天性の異常があったとしてもそれがまひの主要因でなければ補償の対象になることがあるので、ぜひ相談してほしい」と話している。コールセンターフリーダイヤル(0120)330637(平日の午前9時~午後5時)で受け付けている。

心房細動 男性の1割

65歳以上 従来推計の約2倍



65歳以上の男性の10人に1人が心房細動の原因になりやすい心房細動と診断されている。こんな実態が健康日本21推進フォーラム(理事長高久史磨東京大名大学教授)が実施した調査で分かった。患者数は従来の定期健康診断による推計の約2倍の数値という。

調査は今夏60歳以上の男女2万6130人を対象にインターネットで実施。その結果、1793人が心房細動と診断されており、60歳以上の7.7%が心房細動を発症していることが分かった。

発症の割合は高齢になるほど多く

短 信

◇熊本・生と死を考える会10月例会 19日午後2時、熊本市中央区大江の市総合保健福祉センター・ウエルパルクまで。N.P.講演。参加者同士の交流もある。同協会の会費00円、会員外は600円。ファクスかメールで申し込み。20日締め切り。事務局090(7)5774。

◇宇幕制作ポラン入門講座 10月26日、23日の毎週土曜午後4時、熊本市東区泉の泉聴覚障害者情報センターで。聴覚障害者のための、テレビ講座のため、テレビ

おまの目

8月下旬、大阪の堺市に住む孫3人が「じじばば」のところへ遊びに来た。昨年は中学3年の弟と中学1年の妹の2人で来たが、今回は高校生の兄が2人を引率してきた。

帰省中にできるだけ都会では味わえない自然に触れさせようと、人吉の鹿目の滝や水上村の白水滝のつり橋、阿蘇山の火口などを案内した。中でも一番楽しかったのは球磨川のラフティングだったようだ。途中、高さが何倍もある岩から激流の中への飛び込みも恐れもせずに挑戦した孫たち。よくもここまで立派に子育てをしてきたな、と娘に対して感心せずにはいらなかった。

孫たちによれば、くまモンは大阪でも人気があるとのこと。

孫の帰省 香月善秀 (63) 嘱託職員、人吉市